

豊橋市水中文化遺産調査会

海を巡る地域文化の再発見—豊橋市の水城、吉田城址の活用を事例に—

調査研究期間：2019年7月16日（火）～2020年3月31日（火）



歌川広重が描いた吉田城と豊川・豊橋



調査地遠景



吉田城の古写真



潜水調査に臨む学生達

【調査研究の内容・目的】

- 豊橋市の文化・産業発展の歴史は、三河湾に代表される豊かな水域に支えられてきた。しかし明治時代以降の近代化の中で海岸線の埋め立てや漁業権の放棄が進み、多くの市民にとって海は縁遠い場所となってしまった。
- 当事業では、市の中核的な文化財であり、三河湾河口部に築かれた水城・吉田城址を対象に潜水調査を実施する。成果は現地公開イベントやシンポジウムの場でいち早く公開する。水城という注目度の高いコンテンツを切り口に、市民の目を、海を巡る地域文化へ惹きつける起爆剤としたい。
- また、水底に文化財が眠っているという事実は、多くの市民に新鮮な驚き・関心を生むことが期待される。令和2年度からは、広く海の文化財に関わるアウトリーチ教材の開発や街歩きイベント等を実施し、市民自身が海の文化について主体的に考え、継続的に学ぶ環境の創出を進めていきたい。

1. 調査研究内容の詳細

【調査研究代表者】

- 中川永（豊橋市文化財センター学芸員・豊橋市水中文化遺産調査会代表）

【調査研究分担者】

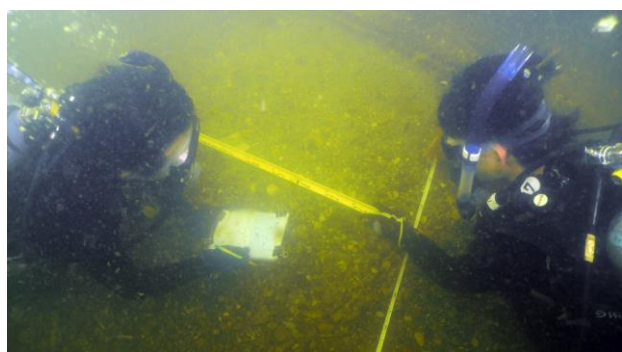
- 木村淳（東海大学海洋学部講師）
- 大西遼（愛知県陶磁美術館学芸員）
- 村上昇（豊橋市文化財センター学芸員。会計）
- 東海大学・愛媛大学学生6名

【実施計画】

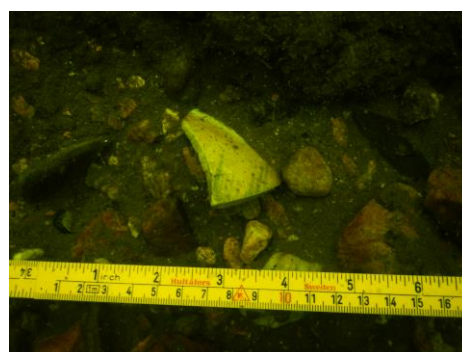
- 2カ年計画1年目

【主な調査研究対象など】

- 吉田城址の前面水域の潜水調査（遺物分布状況等の把握）。
- 水域の防衛や水運に係る諸環境の資料化と検討。
- シンポジウムでのアンケート等による、未知の海の文化財の把握。



遺物の記録作業を行うダイバー（水深6.4m）



発見された陶器（水深6.0m）

潜水調査は、9月21日・22日、10月5日・6日を中心に実施した。吉田城址本丸北面の豊川河床の水域に、東西50m×南北30mの調査区を設定し、スキューバダイビングにより錨や陶器、瓦などの遺物の発見につとめた。遺物の多くは江戸時代中期以降のもので、一部に明治時代のものもある。これら調査により、水中にも数多くの文化財が眠っていることが確認された。前後して実施した補足調査と併せ、当初想定していたよりも広い範囲に遺物が広がっていることが明らかとなり、また地形も地点毎に大きな変化を見せることから、令和2年度以降に調査を継続することで、より具体的な歴史像を描くことができるだろう。

調査期間を通して多くの市民が訪れ、後述の現場公開イベントと併せ、現地は常に盛況であった。「詳しい成果はいつ発表されるのか」「うちの家に古い船道具がある」などの新しい情報も寄せられた。マスコミにも大きく取り上げられ、「豊橋市が主体となり、海の文化財を調査・活用する事業を開始した」ことを、市民に発信する良い機会となった。

また、調査は全国でも例の無い潮間帯の潜水調査として、文化庁調査官や、同庁の水中遺跡調査検討委員会委員長・副委員長らも査察に訪れ、先駆的な事例として高い評価を受けた。今後の調査や活用についても意見が交わされ、近い将来全国的な水中遺跡調査指針として纏められる『水中遺跡調査の手引き（仮称）』への掲載を目指し、今後の事業を継続していくこととなった。



10月5日現場公開の様子



11月16日シンポジウムの様子

調査成果は2回のイベントを通して市民へと発信した。1回目は10月5日（土）に行った潜水調査の現場公開で、調査速報的位置付けで行った。当日は現地での作業を実際に見学しながら、水中写真や調査で発見された遺物、また頒布資料やパネルを中心に成果を報告した。80名を超える参加者があり、多くの質問や意見が交わされる有意義な場となった。また6日（日）朝刊には大きく新聞報道され、記事を読んだ市民が調査中の現地に駆け付けた。最終的には150名を超える市民と交流することができ、8日（火）にはコミュニティラジオが調査について紹介した。

2回目は11月16日（土）に『とよはし歴史座「東海地方と水中の文化遺産」』と題したシンポジウムで、今回の調査成果だけでなく、近隣の三河湾や他地域での先駆的な取り組みについても紹介した。当日は58名の参加があり、アンケートの実施により満足度を計ったほか、市民が実際に思い描いている海の文化財に関するニーズの抽出も行っている。



調査で引き揚げた遺物（瓦・陶磁器）



調査で引き揚げた遺物（錨）

潜水調査で発見された遺物や、水底の岩石の一部についてはサンプルとして取り上げを行った。塩分を含んだ遺物はそのままでは損傷してしまうため、豊橋市文化財センターにおいて脱塩など保存処理を行い、資料化に向けた作業を進めている。

現地で製作した図面類については東海大学において整理作業を進めている。今後の追加調査や、周辺の地理的・歴史的景観との総合的な検討を行い、報告書へ掲載していく。

なお今回の調査で確認された遺物や撮影した水中写真については、令和元年度末から豊橋市文化財センターにおいてロビー展で一般に公開する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大の影響により施設の活動が制限され、中止せざるを得ず、時節を見て改めて実施したい。

2. 本調査研究成果を基に計画・実施可能な 「海の学び」に繋がる博物館活動案

- 博物館活動の形態：水辺の文化財パンフレットの作成と街歩きイベント
- 実施時期：令和2年度以降（新型コロナウイルスの影響により未定）
- 実施場所：豊橋市美術博物館講義室、吉田城址（現地）ほか

【実施内容】

■＜制作物＞

調査成果を中心に、豊橋市内の水辺の文化財について、大人向け・子供向けパンフレットを製作する。パンフレットは単なる読み物としてだけではなく、市民が街を散策しながら、各々のペースで「海の学び」を楽しめるように『街歩きマップ』として活用できる内容を想定している。

■＜活用方法①＞

上記パンフレットを活用した街歩きイベントを開催する。例えば『吉田城址周辺の水辺を歩いて学ぶ』や『歌川広重が描いた海辺の景色を歩く』などのテーマで、学芸員が海とお城、豊橋市との関係を解説しながら、市民が地域と海との繋がりを学んでいく。また浅瀬でのお城に係る考古遺物（土器など）探し等の体験により、直接市民が海と関わり、楽しむ機会としたい。

■＜活用方法②＞

子ども向けパンフレットは、各種イベントや小中学校での出前授業等で活用できる。また市が主体となり夏休み企画として実施している『郷土を探る！豊橋っ子調べ学習コンクール』等、子供たちの主体的な郷土学習の教材としての活用も期待される。

【他の博物館・機関や地域社会との連携や取り組み内容】

■豊橋市には大小さまざまな歴史サークルがあり、水中の文化遺産に係る講演依頼も多い。これまで馴染みの無い分野だけに関心も高く、より学びを深めたいという意見も多いが、当分野は入門書的な書籍に乏しく、パンフレットの製作はこうした市民ニーズにも合致するものと考えられる。

【特に学校教育との連携について】

■上述の子供向けパンフレットの製作の他、大学等と連携した若手研究者育成の場として活用できる。文化財は単に調査するだけでなく、その成果を市民に分かりやすく発信し活用することが重要である。今年度調査に参加した東海大学や愛媛大学の学生を始め、近い将来海の文化財を担う若手研究者に、主体的で自由な発想のもと、力を発揮する機会を提供していきたい。

【事業全体のまとめ】

当事業では 1, 500 m³について潜水調査を実施し、水底に数多くの遺物が眠っていることを確認できた。これまで水城の潜水調査は全国的にほとんど例がなく、特筆すべき成果と言える。一方で新たな課題も浮かび上がった。特に水の透明度は最も良い時でも 1.0m 程度と劣悪で、写真や映像を通した記録には限界がある。これは同時に、一般市民に視覚的に水底の文化財の魅力を伝える困難さを示すものでもあり、音波やレーザーなど、目視によらない方法での地形足測量の実施や、それらデータを基とした模型製作などの必要性が明らかになったといえる。今回の事業では、調査成果やアンケートによる関心の高さから、水底の文化財がもつ『海の学び』達成に向けたポテンシャルの高さは強く感じることができ、今後は市民への還元、いわばアウトプットの具体的な方法についても、検討を進めていきたい。

主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 豊橋市美術博物館・文化財センター	調査資材の借用・会場の設営・遺物の借用

主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 東日新聞	吉田城の実態 豊川から迫る 豊橋市文化財センター「水中考古学」調査本格化 水運機能検証など新発見に期待 令和元年10月6日
2. エフエム豊橋	ラジオ番組『こころぶ』令和元年10月8日
3. エフエム豊橋	ラジオ番組『こころぶ』令和元年11月14日

以上